No.163
公民館だより
平成30年7月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

就任のご挨拶

由良地区公民館長　**磯田充亮**

恒例の由良ヶ嶽登山は今年で五十二回を迎えました。晴天にも恵まれ百八十五人が参加され、若葉茂る山を登られました。春霞もなく山頂からの眺めは絶景、雄大な自然を満喫されたと思います。多くの参加者と登山道の整備をしていただいた皆様に感謝いたします。ご協力ありがとうございました。

さて、このたび枝川館長の退任により後任として就任することになりました。なにぶんにも身に余る重責でございますが、全力を尽くして公民館活動に精励いたす所存でございます。

公民館は、社会教育法第二十条の目的を受け「由良地区公民館は、由良地区民のために、実際生活に即した教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もって住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り生活文化の振興、自活能力の向上に寄与することを目的とする。」規約によりその目的達成のため各種事業を行っています。

宮津市でも少子高齢化が顕著な由良地区ですが、地区内の交流機会の増進を図り、元気な明るい由良地区を目指します。

五月に公民館運営審議会が開催され、今年度の公民館事業（行事）計画が承認されました。公民館役員一同協力して、由良地区民の皆様に「参加して良かった。」と思われるよう創意工夫し、行事を進めてまいりたいと思います。

先に述べました通り由良ヶ嶽をはじめ風光明媚な由良は、「皆さんが住んで良し」の故郷でありますよう、今後ともご協力、ご支援をお願いいたします。

退任のごあいさつ

枝川　隆亮

六月六日例年より一日、また昨年より十四日早く入梅しました。

大きな災害が無く明けてほしいものです。

さて私儀、三月末日をもちまして、由良地区公民館長を辞任させていただくことになりました。

平成十三年四月から四年間、公民館主事、平成二十年五月から約十年間、公民館長として地区の皆様方の温かいご支援、ご指導をいただきながら今日を迎えられたことに深く感謝し、厚く御礼を申し上げます。

在任中に、生涯学習の重要さを認識することができたのは、公民館活動を通じて、多くの人々と触れ合い、貴重な体験を通して学ばせていただいたことであり、今後の人生の糧となります。

生涯学習の拠点である公民館活動行事の中には、昭和五十四年から続く庄内由良との交流、平成十三年のＮＨＫ健康フェアで由良練り込み太鼓披露、平成十四年の宮津・与謝管内で初めての受賞である優良公民館表彰、平成二十年の由良ヶ嶽登山の案内小屋完成、由良川てんころレース、平成二十二年念願であった「丹後由良の歴史年表」発刊、平成二十四年からの「健康づくり運動」による健康広場ウォーキングなどがありました。

今後、公民館活動はますます様々な施策が要求されてくると考えております。新館長のもと、由良地区公民館の更なる発展と、地区の皆様方のご健勝を祈念し、辞任のご挨拶とさせていただきます。

平成３０年度公民館運営審議会委員（順不同・敬称略）

団体名	氏名	団体名	氏名
自治連合会　会長	升田　榮二	栗田中学校ＰＴＡ会長	亀井　正一
脇自治会　会長	松林富次雄	栗田小学校ＰＴＡ副会長	升田　優子
宮本自治会　会長	濱﨑　利雄	由良松寿会長	中西　洋一
浜野路自治会　会長	有本　敬	由良観光組合長	田中　昭彦
港自治会　会長	酒田　彰一	由良実業会長	岡本　康一
下石浦自治会　会長	新宮　鶴雄	子供会連絡協議会長	山田　崇
上石浦自治会　会長	藤本　長壽	公民館長	磯田　充亮
前公民館長	枝川　隆亮	公民館主事	千坂　幸雄
人権擁護委員	大森日向子		

平成３０年度公民館役員（順不同・敬称略　◎印：分館長は代表、部員は部長
○印：副代表、部員は副部長　☆印は公民館だより編集責任者）

館長　磯田　充亮　　主事　千坂　幸雄

地区	分館長	文化部	体育部
脇	○五十嵐敏明	中西　衛	奥野　稔浩
		縞田　一則	長尾　明廣
			北野　礼子
宮本	吉元　誠司	川端　利宏	○中西　一成
		枡岡さとみ	中垣　直之
		大石　美雪	吉元　純子
浜野路	中西　泰之	◎中西　義朗	◎吉成　博一
		岸田　成史	玉垣　光紹
		大森　和子	中西　文
港	中尾　満久	☆森川　泰生	中西　達也
		○山田八十美	中西かほり
下石浦	新宮　恒一	蒲原　順一	野村　馨
			野村　智華
上石浦	◎山下　正貴	藤本　早苗	野村　雄治
体育部講師			森田美砂子

平成３０年度事業計画

文化部

期　　日	行　事　内　容
８月１９日（日）	盆踊り大会（子供地蔵盆協賛）
１１月１１日（日）	文化祭
１２月　７日（金）	しめ縄講習会
１２月１６日（日）	子供料理教室（子供会共催）
１月　５日（土）	囲碁大会（囲碁同好会共催）
２月中旬	人権問題研修会
年３回（７月・１１月・３月）	公民館だより発行

文化祭は１１月１１日（日）　昨年と比べて一週間遅らせています。

体育部

期　　日	行　事　内　容
４月２０日（金）	由良ヶ嶽登山道整備作業
４月２９日（日）	由良ヶ嶽登山（予備日　５月３日）
６月１０日（日）	グラウンドゴルフ大会（個人戦）
７月　８日（日）	四部対抗バレーボール大会
８月１２日（日）	四部対抗ソフトボール大会
１０月２７日（土）	グラウンドゴルフ大会（団体戦）午前中
１月～３月	卓球教室（土曜日　連続講座）

健康広場ウォーキング

期　　日	行　事　内　容
４月２２日（日）	９：００～　地区内ウォーキング
５月２２日（火）	８：４０～　宮津町中ウォーキング
６月１８日（月）	９：００～　地区内ウォーキング
６月２７日（水）	１９：３０～　ニュースポーツ （ユニカール、ファミリーバドミントン）
７月１７日（火）	９：００～　地区内ウォーキング
８月３１日（金）	８：４０～　海洋高校祭（文化祭、ＰＴＡ模擬店等）
９月１１日（火）	９：００～　地区内ウォーキング
１０月２３日（火）	９：００～　地区内ウォーキングと体力測定
１１月１８日（日）	８：４０～　滝上公園ウォーキング
１２月　２日（日）	９：００～　地区内ウォーキング
１月　８日（火）	９：００～　新春由良四社詣ウォーキング、 ニュースポーツ
２月　４日（月）	９：００～　地区内ウォーキング
３月２４日（日）	９：００～　地区内ウォーキング

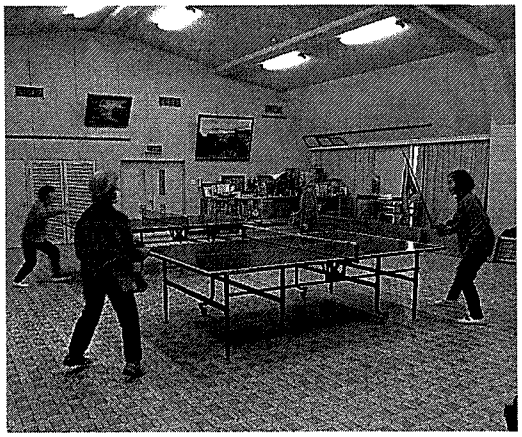
悪天候の時には由良地区公民館大会議室で健康体操を行います。

行事報告

主事　千坂幸雄

◎卓球教室

日時　一月～三月
　　午後二時～午後四時
場所
　由良地区公民館大会議室
一回　一月　二十日（土）八名
二回　一月二十七日（土）九名
三回　二月　三日（土）九名
四回　二月　十七日（土）六名
五回　二月二十四日（土）四名
六回　三月　三日（土）七名
七回　三月　十日（土）七名
八回　三月　十七日（土）七名



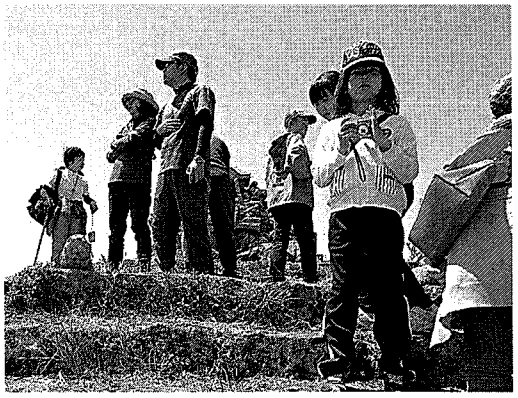
今年の冬は、大雪の地方が多くありましたが、由良においてはそれほど多く降ることもなく、予定していました八回の日程全て実施することができました。参加された方十六名のうち男性が二名、女性が十四名でした。全て参加された方が一名、一回だけ休まれた方が二名おられてすごく上達され、練習を中心に後半はゲームも取り入れて楽しむことができました。

汗を少しかく程度の運動量を心がけ、冬場の運動不足を解消していただきました。

◎第五十二回由良ヶ嶽登山

四月二十九日（土）昭和の日
午前八時三十分～午後三時
登山者数　百八十五名

百八十五名のうち由良地区の方が五十八名、由良地区以外の宮津市の方が四十三名、宮津市以外の京都府の方が六十七名、他府県の方が十七名で、最近では一番多くの方に登山していただきました。



小学六年生までの子供たちは三十五名以上の参加がありました。

思い思いのペースで登山していただきました。早い方は正午までに下山、最後の方で午後二時五十分下山、全員無事に下山できました。

良い天気に恵まれ、山頂の見晴らしは「素晴らしい」の一言でした。多くの方が写真撮影を楽しみ、弁当を和やかに食しておられました。

登山までに、有志の皆様、自治会役員の皆様、観光組合の皆様で登山道整備をしていただきました。又、宮津警察署の方にも協力していただきました。ありがとうございました。

◎由良地区健康広場ウォーキング

○二月のウォーキング
日時　二月二十六日（月）
　　午前十時～午前十時五十分
場所　由良地区内（由良浜コース）
参加者数　九名

今年一番の好天気に恵まれて気持ちの良いウォーキングになりました。

健康づくり運動地域推進リーダー研修会に参加して

得た知識を披露しながら歩いていただきました。枝川前館長から公民館だよりにインターバル速歩の紹介をしていただいています。参考にして歩いてみてはいかがでしょうか。

歩数　四〇七二歩
距離　三、三五km

○三月のウォーキング

日時　三月二十六日（月）
　午前八時三十一分～午後一時五十六分
場所　舞鶴赤れんが博物館
参加者数　二十名

三月下旬ですが気温が二十五度近くまで上がり、空は青く、海はきれい、又、木蓮の花が咲き、草木が芽吹き、春を感じながらのウォーキングになりました。

赤れんが博物館では団体割引で入館でき、説明をしていただきながら見学することができ、良い勉強になりました。

いつも丹後鉄道を利用したウォーキングには多くの方に参加していただいています。これからも良い企画をして楽しく健康づくりをしていければと思います。

歩数　七六三三歩
距離　七、〇〇km

○四月のウォーキング

日時　四月二十二日（日）
　午前九時～午前十時
場所　由良地区内（由良浜コース＋金毘羅神社）
参加者数　六名

晴天、少し暑い日になりました。

ラジオ体操をしてからウォーキングです。

由良地区公民館から浜に出て脇地区まで歩き、金毘羅神社に行きました。金毘羅神社は初めての方もいて説明も入れて有意義なウォーキングになりました。

近くに七曲八峠があり、一度歩いてみたいと言っておられました。この日は、脇地区の方が金毘羅神社を掃除された後であり、気持ちよく歩くことができました。

歩数　三九五一歩（アクティブウォーク）
距離　三、六五km

○五月のウォーキング

日時　五月二十二日（火）
　午前八時四十分～午後二時四十分
場所　宮津町中ウォーキング
参加者数　十七名

丹後由良駅に八時四十分集合、九時一分発の列車で宮津駅まで乗車、宮津駅では、宮津観光アテンダント町中案内の方が三名待っておられました。四方会長を含め四名の案内です。おにぎりとお茶をバッグに入れ、二班に分かれて案内していただきました。

宮津城本丸の石垣、一色稲荷、天方邸、宮津城門（宮津小学校門）、武家屋敷塀、ガラシャ像、カトリック教会、和貴宮神社、大窪山城跡、本庄宗秀・宗武の墓、仏性寺の門、大頂寺、見性寺と蕪村、袋屋、旧三上家住宅を巡り、いわれや物語などで分かりやすく説明していただきました。昼食は大頂寺の本堂上り口を借りました。

暑い日になりましたが、皆さん元気に歩かれました。来年も宮津町中ウォーキングを今年巡ることができなかったところを中心に行うことができればと思っています。

歩数　七三〇〇歩
距離　五、六km

栗田小学校着任のご挨拶

栗田小学校　教頭　田中晴彦

この春から栗田小学校に教頭として着任しました、田中晴彦です。私は平成十六年四月から五年間、栗田小学校に勤務し、多くの子ども達と出会い、多くの保護者・地域の方にお世話になりました。自分を成長させてくれた思い出深い学校に再び勤務することができ、うれしく思っています。ただ、今は当時と大きな違いがあります。まず、由良地区の子ども達が栗田小に通っていること。もう一つは栗田小・中・幼稚園が「栗田学院」として小中一貫教育（幼稚園の年長も含めた十年間の幼小中一貫）を行うようになったことです。以前勤務していた頃も、栗田中学校ブロックの二小・一中・一園がそれぞれの目標のもとで教育を行いながら、合同研修会等を行っていました。しかし、栗田学院として、同じ目標で中学校卒業までの教育を行っていくという小中一貫教育は、当時の「連携」というレベルとは全く別のものです。来年度からは栗田学院の小中一貫教育が本格実施となることから、その前年度に着任したことの責任の大きさを日々感じています。

ところで、私は伊根から通勤しています。舟屋の立ち並ぶ地域です。由良、栗田も海と密接に関係した生活を営んでいる地域ですが、私も伊根で生まれ育つ中で、海と密接に関係を持った暮らしをしてきました。子どもの頃から、毎日のように食卓には魚料理がのぼり、遊び場の多くが海でした。小学生時代の夏休みには毎日のように海で泳いでいましたし、中学生ぐらいになると、友達と小舟の艪をこいでは魚釣りに行きました。また、父は、戦争で兄をなくしたため、中学校を卒業してすぐに家族のために漁師として働くこととなり、それ以来、漁師一筋で家族を養ってくれました。母も同じく伊根の生まれで、いわゆる三八豪雪の時に舟に乗って嫁入りしてきたそうです。まさに海との関係は切っても切れない我が家です。

由良地区には、荒々しい海、美しい砂浜、一級河川である由良川があります。同じ日本海に面していても、伊根の風景とは全く違います。激しく岩に当って砕ける波、美しく長い砂浜にたくさんの海水浴客が集まる様子は、私の身近にない非常に新鮮な海の姿です。

今年度栗田小学校に着任し、恥ずかしながら、由良が北前船の港として栄えていた歴史を初めて知りました。また、百人一首の「由良のとを渡る舟人かぢを絶えゆくへも知らぬ恋の道かな」の舞台は、由良川河口とのこと。有名な山椒大夫の他にも、興味深い歴史・文化や豊かな特産物のある由良について、私自身がしっかりと学ばなければなりません。

新学習指導要領が平成三十二年度から本格実施となります。今年度から、その移行期間として道徳の教科化や英語科・外国語活動の充実等が始まっており、教育改革はすごいスピードで進行中です。家庭・地域社会と連携した教育の中で、子どもたちがこれからの社会を創り出していくために必要な資質・能力等を育んでいくことになります。皆様方のご理解・ご協力を賜りますようお願いいたします。

温かな見守りの中で育つ子どもたち

栗田中学校　教頭　角野晴彦

この度の人事異動によりまして、宮津市立栗田中学校の教頭として着任いたしました角野晴彦と申します。微力ではございますが、精一杯がんばりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

この栗田中学校には、八年前に二年間お世話になった地域の皆様や保護者の皆様に、学校や地域の会議等でお出会いし、懐かしさとともに、学校・家庭・地域が一体となって、子どもたちの成長を見守っている、この栗田・由良地区のすばらしい姿に、感動を覚えました。私自身も、その一員に加わらせていただき、子どもたちの健やかな成長を見守り、日々教育活動に邁進していきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

また、私事ですが、この栗田中学校が、私の母校でもあります。自分自身が中学校三年間を過ごした学校に、教頭として勤務できることを大変うれしく思います。

自分の中学校生活を振り返ってみますと、地域の皆様はご存じだとは思いますが、まだ木造の校舎でした。今、第二グラウンドになっている部分に校舎が建っていました。木造ですので、廊下を歩くとギシギシと音がして、いかにも古いなあと感じるほどでした。体育館も狭く、バスケットボールの一面がようやくとれる広さでした。その体育館で、毎日部活動に励んでいたことを思い出します。校舎は古かったですが、木造の温かみを感じながら過ごしていたように思います。

生徒数も三百人近くいたように思います。私自身は丙午の年の学年で少し人数が少なかったですが、それでも二クラスあり、大勢の同級生に囲まれて学習に励んでいました。体育祭は、地区ごとに栗田上・栗田中・栗田下・由良脇・由良中の五地区に分かれ、競技や応援合戦などで競っていたことを思い出します。

部活動も多く存在し、男子は野球部・バスケットボール部・テニス部・卓球部がありました。女子は、ソフトボール部・バスケットボール部・バレーボール部・テニス部があったように思います。

今思い返すと、中学校時代の楽しい思い出がたくさんよみがえってきます。中学生だった私には、その当時はわからなかったのですが、今考えると、このときも地域の皆様や保護者の皆様から、多くの温かいご支援をいただいていたことがわかります。このすばらしい栗田・由良地区の伝統をこれからも大切にして、栗田中学校の教育活動を進めていきたいと思っています。

今年度、栗田中学校は、「栗田学院 栗田中学校」として、「宮津市小中一貫教育」の試行実施を進めています。栗田幼稚園・栗田小学校・栗田中学校が、共通の教育目標「未来を生きる心身ともにたくましい幼児・児童・生徒の育成」を設定し、その目標達成のために、さまざまな活動を計画・実施しています。

栗田・由良地区の皆様、保護者の皆様には、小中一貫教育に係る活動に対しまして、ご理解とご協力を重ねてお願いし、着任のご挨拶としたいと思います。よろしくお願いいたします。

ご挨拶

栗田小学校ＰＴＡ副会長　升田優子

由良地区の皆様、今年度、栗田小学校ＰＴＡ副会長を務めさせていただきます升田優子と申します。日頃は栗田小学校ＰＴＡ活動にご理解ご協力を頂き感謝申し上げます。

さて、四月から由良地区一名、栗田地区六名の新一年生を迎え元気よくスタートしました栗田小学校ですが、由良地区の子供たちが栗田小学校に通い始めて六年の年月がたとうとしております。

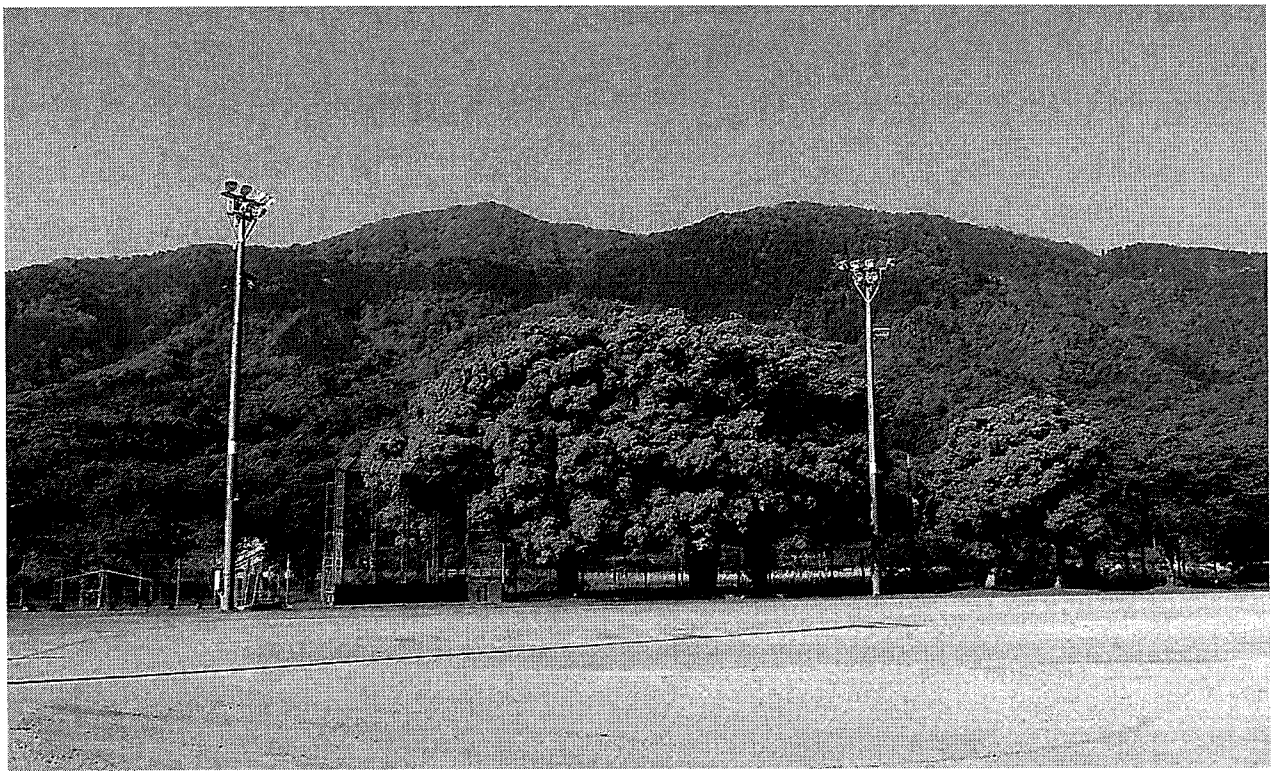
その年に入学しました娘が六年生になりました。慣れないところで大丈夫かな?知らないお友達の中で泣かないかな?と少し心配しながら入学の日を迎えたことがとても懐かしく思えます。心配をよそに、毎日学校であったことを笑顔で一生懸命話すわが子を見て、少し頼もしくも思いました。これも地域の皆様のおかげだと思います。毎朝

「おはよう!」

「行ってらっしゃい。」

と、声をかけてくださるだけで子供たちは安心して登校することができています。地域の行事では、いつも温かく見守っていただいてありがとうございます。

皆様とのつながりを大切に、子供たちが楽しい小学校生活を送れるように、しっかりとＰＴＡ活動に取り組んでまいりたいと思います。今後も皆様のご協力とご指導をよろしくお願い致します。



グラウンドから由良ヶ嶽を望む

宮津市　北前船日本遺産に

「北前船日本遺産追加認定」

由良の歴史をさぐる会　加藤正一

荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落」

宮津市の日本遺産構成文化財計九件

- 旧三上家住宅
- 日吉神社
- 和貴宮神社の玉垣
- **由良金毘羅神社**
- 新浜の町並み（花街）
- **由良の船絵馬群**
- 三上家文書
- 加藤家文書
- 宮津おどり

この構成に由良の金毘羅神社、由良の船絵馬群が構成の大きな要素になっている。今後この事を如何に次世代に引き継ぎ、有効に活用して行くか、が今後の課題となる。

日本遺産（Japan Heritage）地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産（Japan Heritage）」に認定するとともに。ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に戦略的に発信することにより地域の活性化を図るためにつくられた文化庁の認定制度。

ストーリー

日本海や瀬戸内海沿岸には、山を風景の一部に取り込む港町が点々とみられます。そこには、湊に通じる小路が随所に走り、通りには広大な商家や豪壮な船主屋敷が建っています。また、寺社には奉納された船の絵馬や模型が残り、京など遠方に起源がある祭礼が行われ、節回しの似た民謡が唄われています。

右、日本遺産の説明は経済戦略局報道発表資料（二〇一八年五月）による。

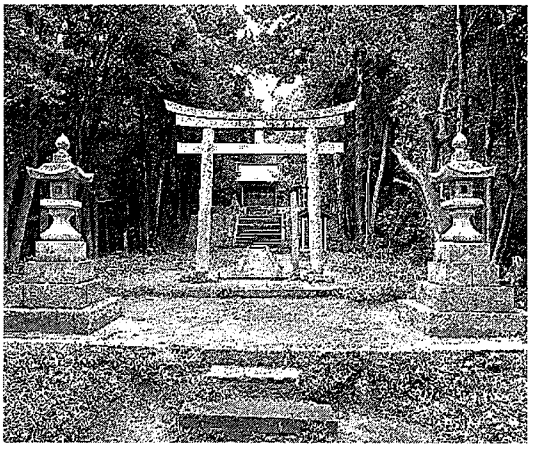
日本遺産認定（平成二十九年四月二十八日）

函館市・松前町・鰺ヶ沢町・羽化浦町・秋田市・酒田市・新潟市・長岡市・加賀市・敦賀市・南越前町

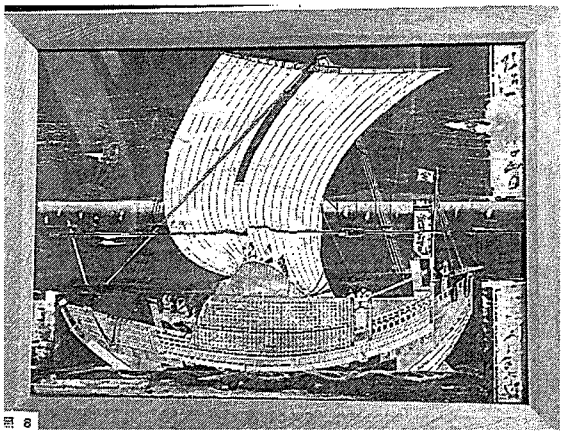
日本遺産追加認定（平成三十年五月二十四日）

小樽市・石狩市・野辺地町・能代市・男鹿市・由利本荘市・にかほ市・上越市・佐渡市・富山市・高岡市・輪島市・小松市・坂井市・小浜市・**宮津市**・大阪市・神戸市・洲本市・赤穂市・高砂市・新温泉町・鳥取市・浜田市・倉敷市・呉市・尾道市

合計三十八自治体



由良金毘羅神社



由良の船絵馬

庄内由良との交流

由良の歴史をさぐる会　飯澤　登志朗

山形県鶴岡市庄内由良との交流は昭和五十三（一九七八）年夏、庄内由良の文化財愛好会会長佐藤儀助氏が丹後由良を訪れ、蜂子皇子伝説を伝えたのが始まりである。

その後、昭和五十五年十一月、由良の歴史をさぐる会々員が庄内由良を訪問、出羽三山を開祖した蜂子皇子について、先の佐藤儀助氏から改めて詳しく説明を受けた。

昭和六十年十一月、庄内由良から自治会長を団長として丹後由良訪問団が来訪、「庄内由良・丹後由良友好の浜」宣言を締結し、その後三年毎に交互に訪問団の派遣を続け今日に至っている。

蜂子皇子について簡単に触れると、第三十二代崇峻天皇が伯父で大臣（おとど）の蘇我馬子と対立し馬子の命令を受けた部下に暗殺される。

危険を感じた第一皇子である蜂子皇子は従兄の聖徳太子や他の重臣の助力を得て都を脱出し丹後の国由良にたどり着いた。

そして由良の船頭たちを連れて船旅に出発する。庄内の八乙女海岸沖まで来ると荒海にそそり立つ断崖絶壁の巨岩が眼前にあり、その岩の上に八人の美しい乙女が笛の音に舞いながら皇子を招いている。皇子は不思議に思いながら上陸し滞在する。

ある日、東の山並みを見ると紫の雲が漂っていた、いつの間に飛んできたのか目の前に三本足の烏が一羽羽ばたいていた、烏に導かれ付いて行ったところが羽黒山であった。

蜂子皇子は滝に打たれ幾日も幾日も難行苦行の修行をされて山頂に出羽神社を建立し、この時をもって出羽三山神社ご開山の年とし、蜂子皇子を「御開祖」と仰ぐようになった。

過去に庄内由良を訪問された多くの由良地区の皆さんもそれぞれに思い出があると思うが、当時の小学生の感想が公民館だよりに掲載されていたので一部紹介したい。

これは平成二十四年の訪問である。

小六　O君

花笠おんどをいっしょにおどった、だけどぜんぜんおどりが分からなくてがんばっておどりました。

小六　N君

バスに乗って山形へ行きました、加茂水族館へ行きました。そこはクラゲが世界一の水族館でした。

小六　M君

山形についてすごい歓迎をしてくれてうれしかった。出羽三山にお参りして精進料理を食べました。

小六　U君

夜七時に由良を出発、ホテルに着いて朝食を食べて、つるおか市の市長さんに会いにいきました。もう庄内由良小と交流はないかもしれないけど、できるかぎり交流をやめないでほしいです。

宮津市由良小学校も鶴岡市由良小学校も今は閉校となり学校間の交流は出来ないが、長く続く市民交流は閉じてはならない。

今年は丹後由良から訪問する年に当たり、関係者各位が準備をすすめられているが、児童も述べているようにいつまでも変わらぬ交流が続くことを願っている。

四十七年間に渡る スイスでの生活を振り返って(五)

セバーグ由良住民　高橋　洋二

今回は私が住んでいたジュネーブ州（フランス語圏）について、個人的に興味を持った歴史的な出来事、三点ついて述べさせていただきます。

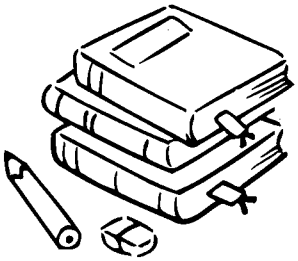
一点目は、紀元前五十八年に古代ローマ帝国のジュリアスセザー軍がジュネーブにやってきて、スイス民族の祖先、ヘルベチア族のジュネーブ強行突破の通過を阻止した事実です。この出来事は、世界最古の歴史書と云われるガリア戦記（著者はジュリアスセザー）に史実として記録されています。当時のジュネーブは小国ながら独立した国家形態を保っておりローマ帝国の属国として年貢を納め庇護を受けておりました。

一方、ヘルベチア族とは、紀元前よりスイス中部山岳地帯の山々に囲まれた土地に分散、暮らしていたスイス人の祖先の名称です。東の境目はライン川であり、川の東側はドイツ人の先祖ゲルマン族の領地となります。又、北部の境目は、ジュラ紀に隆起したと言われるジュラ山脈（標高約千六百メートル級）が西のフランス領からスイス国の東北方面へと延びておりドイツ、フランスと国境を接するライン川に沿ってバーゼルの町が有ります。（化学薬品、製薬会社や各種研究所が多く、スイスの一人当たり所得が最も高い州として良く知られております）又、南側は、二千から四千メートル級の中央ヨーロッパアルプスがスイス国を横断しており、山に挟まれた土地は狭く冬は厳しい寒さにより極めて発展性に乏しい生活に見切りをつけ、暖かく、地味の肥えた海辺の土地への民族大移動を企てたのです。先ず部族総会などを開き紀元前五十六年頃より移動の準備を始めたようです。目的地は、ガリア国（現フランス国）の大西洋側に面したブルターニュ地方でした。当座は、家畜を肥やし、穀類を備蓄、軍備も怠らず二年間ほどかけ移動の支度を念入りに行います。一方、移動に関する地理的条件が大きな問題となりました。ガリア国へ進出するには、北側に横たわるジュラ山脈を越えて進むか、若しくはローヌ川に沿って平坦地を西へ移動し、レマン湖畔の最西端に位置するジュネーブの地よりローヌ川に懸る橋を渡り更に平坦地を西進する事が婦女子や、家畜を伴っての大移動には、明らかに容易である為、ローマ帝国に対し、「略奪行為等は一切しないので」ジュネーブを平和的に通過させてほしい旨ローマ帝国に申請をしました。許可を得る交渉をしたのですが拒否されてしまいます。理由は紀元前百年ごろ、ローマ帝国からヘルベチア視察に訪れたセナ（上院議員）が、ヘルベチア人に暗殺されたという因縁が有った為と云われております。ガリア戦記によれば、ヘルベチア族は足腰が強く、最強の軍団として当時から認識されておりました。ヘルベチア族も自信が有ったのでしょう、拒否されたにも

拘らずジュネーブからのローヌ川渡河を強行突破しようと企てます。その為ジュリアスセザー軍が渡河を阻止するため紀元前五十八年ジュネーブにやって来たのです。属国のジュネーブからも徴兵し軍隊を増強、更にローヌ川よりジュラ山脈に沿って長蛇の防御壁を巡らし万全を期し防戦した為、ヘルベチア軍は、突破に不成功、渡河を諦め、結果としてジュラ山脈越えを余儀なくされました。出発に先立ち、二度とヘルベチアに戻る事の無いようにとの固い決意を全員に示す為、自分たちが住んでいた村々の家や畑を完全に焼き払い老若男女、家畜軍隊、食糧を整い、当時の道なき道の難儀と苦労の多い山脈越えを決行した訳です。

　これは正しくヘルベチア民族が故郷を捨て新天地を求め夢見る「民族の団結心と内なるエネルギーの結晶」が彼らの希望に溢れる大胆な決意と行動を突き動かしたものと思われます。さてジュラ山脈を越えた北側は、既にガリア国（フランス）の領域になる訳ですが、当時は、国際法なども無かった時代ですので、進出する先々で接触するガリアの部族と村の通過交渉や食糧補給の交渉等を繰り返しながら西へ西へと民族大移動をして行く訳ですがガリアの部族も「はいそうですか、どうぞどうぞ」と協力的では有りません。むしろ何故ヘルベチア族が西進するのか大いに訝った事でしょう。相手の返事が思わしく無かったり拒否されたりすると、軍事力による略奪と強行突破を先々の部族間で繰り返しつつ彼等もヘルベチア族の命運を掛け更に西進を続けて行ったのです。

　ガリアの各部族は自力での西進阻止が出来ないのみならず甚大な損害を被った為、各部族代表が集まり協議の結果、ローマ帝国に援軍を要請する事になりました。現在ワインの産地として有名な比較的パリにも近いブルゴーニュ地方（中心都市としてはデイジョンの町が有ります。）の手前の丘陵地帯でローマ軍と対峙する事になりました。戦況結果は、ヘルベチア軍の大惨敗となり、故郷のヘルベチア（スイス）に戻る事を降伏条件に、命からがら生き残ったヘルベチア人達は、一度は見捨てた彼等の故郷に戻る事を義務付けられ、夢と希望を断腸の思いで、諦める挫折の結果となってしまいました。故郷に戻った彼等の心境は如何なるものだったのでしょうか？この史実で私が感銘を受けた事は、紀元前（日本の弥生時代に当たります。）の人々と私共、現代人を比べてみると、何ら変わりが無いことへの驚きでした。即ち、謀略、陰謀、裏切り行為、欲望、軍事力の誇示、権力志向等々、正に私共現代人の遺伝子に、しっかり受け継がれていると言う当たり前の事実でした。



西郷隆盛（二）

中西　衛

安政元年（一八五四）正月二十一日、薩摩藩主、島津斉彬の参勤の行列の中に二十八歳の青年、西郷吉之助は中小姓として加わり江戸へ向かっていた。

一行が出発して一時間程経ち、水上坂（鹿児島市）上の茶店に到着したとき、斉彬は左右の者に向かって「西郷吉之助はいずれに在るか」と尋ねた。西郷とはどんな相貌をした成年なのか、是非本人を一見しておきたいと思っていたからである。これからこの君臣の間には親しい関係が生じ、やがてそれは水魚の交わりとも言える程のものに発展していくのである。三月六日江戸に着いた。四月には庭方役を拝命するのである。この庭方役は斉彬の非公式な密事を取り扱う秘書的な仕事をするいわゆる情報収集役であり、格はそれ程高くない職ではあったが、西郷はこのような処遇に感激し、この主君のためであれば命もいらぬとばかり思ったようである。

時に、六月晦日から斉彬が起居も出来ないぐらいの重病と成り、主人はどうなることか心配していたところ斉彬の五男で世子でもある虎寿丸が七月二十四日急死するという不幸な出来事が起こった。斉彬には虎寿丸の他に四人の男子があったが既に四人とも夭死してしまい五番目の虎寿丸もやっと六歳まで成長していたのに、これも急死したのである。西郷は自分の命と引き換えても主君斉彬の病気が一日でも早く治癒するよう目黒の不動に祈った。これはまさに忠義の極致とも云えるような行為であった。この頃の西郷は主君斉彬を神的存在としてとらえ、殉教への憧れとも受け取れるような思考をしており、絶対的に服従できる主君を得たという確たる心境であったのではあるまいか。

安政元年四月十日、西郷は樺山三円の案内で水戸藩邸へ行き藤田東湖、戸田忠太夫等に紹介され、その後も度々水戸藩邸を訪問するようになり、彼らの薫陶を受けた。そして翌二年六月からは越前藩士、矢島錦助宅に於いて越前、柳川、肥後の各藩士等と月例会（月二回）を催し、視野の拡大に努め、且つ、人脈の拡大にも努めていった。その中でも橋本左内とは無二の親友となった。このような西郷の行動は只単に西郷の思惑だけではなく、背後から斉彬が意図的にその環境作りに一役買っていたのではないかと考えさせられる節があるのである。斉彬は西郷の交際費として五十両を用意して直々与えたのではないかと考えられるのである。斉彬は西郷に潤沢な交際費を与え、他藩士との交際がスムーズに出来るように資金面での援助をしたとも受け取れ、西郷の他藩士との交際も結局は斉彬の意図した一定のレールに西郷を乗せて走らせるための準備であったと云えるのではなかろうか。

こうして斉彬は自分の期待通り成長してきたと見るや西郷を自分の部屋に呼び込んで密談するようになる。

こうした斉彬の教育の下で西郷はすくすくと成長し、他藩との機密の交渉に用いられるようになった。安政三年八月五日の大山正円宛書翰には水戸藩の安

島帯刀や武田耕雲斎等が腹の底を打ち明けて話してくれることに関して、「如何にして我式に水府の人傑腑腸給うべきや、実に君徳の然らしむる処恐れ入り候儀に御座候」と斉彬のお蔭を強調しているのである。つまり、西郷は重大な任務をスムーズに成し遂げられる者、結局斉彬の人徳の賜物であると考えており、決して斉彬への尊崇の念を忘れなかった。

一方、斉彬の方も「私、家来多数あれども誰も間に合うものなし西郷一人は、薩摩貴重の大宝也、乍レ併、彼は独立の気象あるが故に、彼を使う者、私ならではあるまじく」と語ったと伝えられている。

西郷が奄美大島へ流されたのは、安政五年（一八五八）から翌年にかけて吹き荒れた「安政の大獄」による。安政の大獄は幕府の大老井伊直弼が公家や志士らを弾圧した恐怖政治で、西郷と交友関係があった橋本左内や吉田松陰らが何人も捕縛、投獄の果てに処刑された。その標的とされた一人が京都清水寺の尊攘僧、月照だった。月照は西郷よりも十四歳年長で、左大臣近衛忠熙（天璋院篤姫の養父）の屋敷に出入りし、尊攘派の志士とも交友関係があり、幕府に目をつけられた。

西郷は藩命を受けて上京し、月照と接触して情報収集に当たっていた。すると近衛忠熙から「幕府から追われる身となった月照を守ってくれないか」と頼まれた。しかし、幕府の捜索の手が厳しかったため、鹿児島まで連れて行って薩摩藩で匿おうとしたが、それも難しいと知って責任を痛感、かくなる上は月照と共に死ぬしかないと思い、鹿児島の錦江湾で航行中の船から身を投げたのだった。

そこまでしたのは、月照に恩義を感じていたからだ。月照を護衛して京都を出たのは九月十三日だったが、その二ヶ月ほど前、七月十六日に自分を大抜擢し、目をかけてくれた藩主、島津斉彬が急逝したとの報に接し、西郷は殉死しようと思い詰めた。そのとき、思い留まるように諭したのが月照だったのである。その月照を救えない以上、自分も死のうと入水した西郷であったが、天はそれを許さなかった。

船に乗っていた他の者が水音に気づき、西郷だけが奇跡的に助かった。薩摩藩は、幕府の厳しい追求の目をごまかすために、西郷を死んだことにして墓まで建て、さらに人目につかない奄美大島へ流した。安政六年（一八五九）一月のことだった。従って、月照事件での西郷は犯罪者扱いではなく「潜居」（身を潜めて暮らす）扱いだったので、島では自由に行動できたし、扶持米も六石支給され、万延元年（一八六〇）には十二石に加増されている。文久二年（一八六二）まで三年間、奄美大島で謫居した後、次は島津久光の怒りをかって、文久二年（一八六二）七月から元治元年（一八六四）二月までの一年半、徳之島、沖永良部島に謫居した。この二往復に費やした日数は延べ数ヶ月になるから、隆盛の国事離れは五年間であった。

三月十八日、久光に拝謁して、軍賦役兼諸藩応接係を命ぜられた。西郷が京都における薩摩藩の事実上の代表者となったわけである。六月五日夜、長州藩士など尊攘派の三十名が、新撰組に襲撃された池田屋事件が起こった。七月十九日朝、長州との間に禁門（蛤御門）の変が始まった。伏見を発した長州軍は、大垣藩兵によって進撃を阻止されたが、天龍寺の長州軍は御所に到達、蛤門などの会津、桑名藩兵を後退させ、宮門に迫る勢いであった。西郷の指揮する藩兵は、乾門から応援に駆けつけ、蛤門付近で激戦を展開し、長州兵を敗走させた。この

変による火災は京都の東西に広がり、二万七千軒が焼失した。二十日には六角牢獄に投獄されていた平野国臣など三十三名の志士が、新撰組に処刑された。西郷は小松と協議し、戦火の被災者を救助するため、押収した長州兵糧米五百俵を東洞院錦小路の藩邸で放出した。西郷は、流弾によって足を負傷しながら大功を立てて、十月には御側役に進んだが、「戦好きではあるが、実際の戦場に臨んでは、二度と戦争はしたくない。実に難儀なものである。」と士持政照や得藤長に書き送っている。

九月初め、征長副総督となった越前福井藩主松平茂昭に従って、入京した藩士、堤・青山両名が、西郷を訪ね、近く江戸に帰る。神戸海軍操練所の勝海舟に会い、将軍の上京を求めるよう西郷に勧めた。西郷は即座に同意し、十一月、吉田友実、堤と青山が同行して、大阪で勝と西郷の会談が行われた。これは、西郷にとっても勝にとっても運命的な出会いとなった。勝は、幕府の軍艦奉行でありながら初対面の西郷に幕府の内情を披瀝した。幕吏は天下の形勢に暗く、お互いに責任を回避し、その腐敗無能ぶりは、手のつけられないような状態である。異人も幕吏を軽蔑し、相手にしない実情である。従って、賢明な大名四、五名が会盟し、異艦を打ち破るだけの兵力で、横浜と長崎の両港を開き、兵庫の開港については、筋を立てて会談し、条約を結べば国の基本方針も決まると答えた。勝は西郷の印象を、「そのとき西郷はお留守居格だったが、くつわ紋のついた黒縮緬の羽織を着て、なかなか立派な風采だったよ。…その意見や議論は、むしろ俺の方が勝るほどだったけれども、いわゆる天下の大事を負担するものは、はたして西郷ではあるまいかと、また、密かに恐れたよ。」と述べている。勝は、文政六年（一八六三）正月、旗本の長男として江戸に生まれ、西郷より五歳年上であった。西郷は大久保への書中に、「勝史へ初めて面会仕り候処、実に驚き入り候人物にて、最初は打ちたたく（やっつける）つもりにて差し越し候処、頓と頭を下げ申し候。どれだけ知略のあるやら知れぬ塩梅に見受け申し候。」と述べ、勝という人物に「ひどくほれ申し候。」と深く感服し、以来、肝胆相照らす仲となったのである。

土佐藩浪士、坂本龍馬は、西郷と勝海舟が会った頃、初めて西郷と会った。神戸海軍操練所廃止後は、西郷は勝に頼まれて、龍馬を薩摩藩邸に潜伏させていた。鹿児島での龍馬は、西郷家の厄介になり、ある日、糸夫人に「一番古いふんどしをくださらぬか。」と頼んだ。夫人は、請われるままに使い捨てのふんどしを与え、帰宅した西郷に話すと、目から火が出るほど叱られた。「お国のために命を捨てようという人だと知らないか。早速、一番新しいのを替えてあげろ。」と。あんなに怒ったのは一度だけだったと、糸夫人が述懐したという。龍馬なり、西郷なりの人柄が良くにじみ出ている逸話である。龍馬の西郷評は、「坂本が薩摩から帰ってきて言うには、『なるほど西郷というやつは、わからぬやつだ。少しくたたけば少しく響き、大きくたたけば大きく響く。もし、馬鹿なら大きな馬鹿で利口なら大きな利口だろう。』と言ったが、坂本もなかなか鑑識のあるやつだよ。」との勝の話から知ることが出来る。

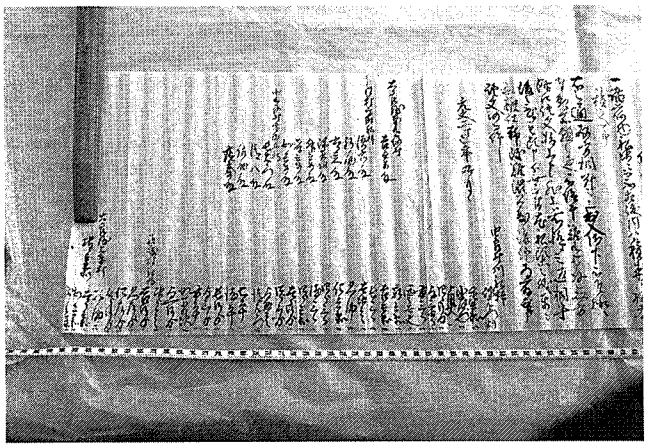
慶応二年（一八六六）正月二十一日、京都二本松の薩摩藩邸で小松・西郷と木戸との協議が行われ、龍馬の立ち会いの下で薩長二藩の同盟が成立した。

由良が光り輝いていた時代（6）

由良の歴史をさぐる会　加藤　正一

資料編　No.6

由良川舟運における
由良大船団
二十八人の船持ち



「一札之事」元文二年（一七三七）
（福知山教育委員会蔵）

一、此度由良・神崎川舩積荷物、舩継ニ付、有路高瀬舟持共目安差上、由良・神崎船持共江返答書指上候様ニ御裏書被成下候処、大庄屋上東村次兵衛・同南有路村吉兵衛双方江相対之上、納得仕候趣左之通、
一、登り荷物之分、不残弐ヶ村河原ニ而有路高瀬舩、江積請候事
一、塩船ハ由良・神崎川舩、福知山迄直ニ積登候事
一、他所舩下り荷物ハ先達而相対之通り、三ヶ弐ハ由良・神崎舩、三ヶ壱ハ有路舟積下り申候事（中略）
元文二丁巳年九月日（一七三二）
由良村川舟持二九名
神崎村舟持八名
有路村高瀬舩持七名
北有路村高瀬舩持四名
（京都府立丹後郷土資料館「大海原に夢を求めて」より）

概要
一このたび由良、神崎、川舩の積荷物の舩継につき有路高瀬舩持ち達が訴状を出した。由良・神崎、舩持共へ返答書を出すよう御裏書していただいた所、大庄屋上東村次兵衛・同南有路村吉兵衛双方面談の上左の通り納得した。
一登り荷物の分、残らず弐ヶ村河原にて有路高瀬舩に積請る事
一塩舩は由良、神崎川舩、福知山迄直に積登事
一他所の舩の下り荷物は先だって面談した通り、三分の二は由良、神崎舩、三分の一は有路舩が積み下る事
元文二丁巳年九月日（一七三二）
由良村川舩持二九名
神崎村舩持八名
有路村高瀬舩持七名
北有路村高瀬舩持四名
との内容であり、由良村川舟持の名前が自署されている

初公開　由良村の川舟持
作右衛門
庄兵衛
小左衛門
奥
四郎左衛門
与三次郎
市三郎
西之太夫
薪兵衛
吉兵衛
長三郎
太次兵衛
久助
仁兵衛
四郎三郎
徳三郎
四郎兵衛
太郎左衛門
四郎右衛門
与惣兵衛
清右衛門
七平
徳平
長左衛門
与三衛門
市平

加平次
与一左衛門
神崎村川舟持ち
人数八人名判

実は大江町史・舞鶴市史では由良川舩持ちは二十八人となって京都府立資料館の「大海原に夢を求めて」二十九人と食い違いがあるが、ここでは福知山市教育委員会から教えて頂いた二十八人の名前を掲載しました。

この時代に由良の家数は精々三百～三百五十軒に対し二十八人も舟持ちがいたとは、十二軒に一軒川舟を持ち由良川舟運に関わっていたことになる。田辺藩の前記「一札之事」に記載されている

一、塩船ハ由良・神崎川舩、福知山迄直ニ積登候事

からも解るようにこの頃は福知山迄直に積み登るためには、川底が浅い為、せいぜい二十石積位の舟であったと考えられる。（大きさは保津川下りの舟位）

それにしてもなぜこれだけの舟を持ちえたのだろう？

その一つとして説経節ではあるが平安時代の事として山椒大夫にも出てくる、安寿は汐汲、厨子王は柴刈り。これは塩作りを現している。由良川の上流の福知山には五世紀には大きな私市円山古墳が作られており、即ち大勢の人が住んでいたことになる。人が大勢いると云うことは、塩が沢山必要と云う事にもなる、由良は海に面している。塩造りの遺跡は見つかっていないが、川向こうの神崎には平安時代の塩造りの遺跡が見つかっている。必然的に塩を造りそれを上流まで運ぶ手段としての川舟舟運が発達してきた。

公民館だより二〇一六年七月発行第一五七号にも書きましたが丹後国加佐郡寺社町在舊記享保十六年（一七三一）には往昔より塩焼経営塩浜の体　東西二十町に及びて・・・塩焼塩窯その数しらずとあり、又田辺藩　土目録抄　延享三年（一七四六）塩浜長さ六百二十三間（約1.1㌔m）釜屋数百九十七軒。時代は違うけれど、五番萬集録文久三年（一八六三）福知山塩問屋が扱った塩の量一年間合計

十州塩（瀬戸内産）三千八百四十八俵
由良、神崎　一万四百七十俵

多くの塩が上流へ運ばれている。

そのニ、海と川の結節点であり丹後国加佐郡寺社町在舊記享保十六年（一七三一）には「売船その数百三拾艘に及べり・・（略）・・・荷物十分仕込み、水主、梶取り、打乗　川嵐しに帆を挙げ先ず沖の嶋を目当てに駆出す。」

とあり、由良湊に百三十艘もの船や荷物が集まってきている。やはり上流まで運ぶ手段としての川舟舟運が発達してきた。

これらのことから、想像できるように由良の住民が必然的に舟を持つようになってきたものと思われる。何時頃からと云う時代的には不明である。

川舟持の名前を先祖に持たれる方、「由良の歴史をさぐる会」にご連絡頂きたい。由良の北前船に関することがより明確になる可能性がある。

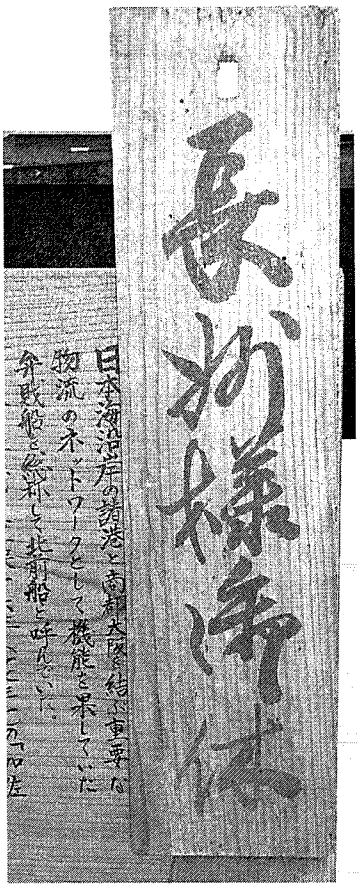
例えば舞鶴市史、や先賢の歴史研究家真下氏が書かれている「米屋（磯田）四郎左衛門について、磯田家は田畑持ち高が十石足らずの百姓である。十石足らずの農業経済力で船の獲得は到底考えられず、浦方船持ちの出自によくある、町人船持ちなどに雇われて乗組んだ末船頭に昇進し、のち自立して船持ちの道を歩んだとも思われる」

ところがこの名簿をみると、由良川舟持ちの中に明らかに四郎左衛門の名前がでてくる。これから考えられることであるが米屋四郎左衛門家は、由良川舟持ちで財を二～三代掛けて蓄え時流に乗り近海廻船へと乗り出したことが想像される。

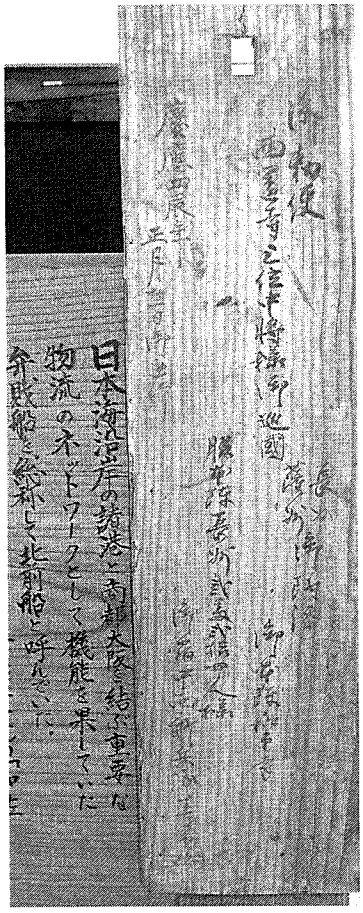
これが事実なら他の由良の北前船の船持ち歴史の認識が大きく変わる事となる。

今年は明治維新（一八六八）より　百五十年の節目に当たる
由良にその歴史遺産があり!!

「その一」（表）「長州様御休」木札



（裏）御勅使　長州　御諸藩　丹後御大名衆　御供
薩州
西園寺三位中将様御巡国　御本陣松原寺
脇本陣長州弐番二十四人様
慶應四年辰年正月二十一日御巡行　御宿中西新兵衛春常　花押



御勅使（鎮撫使）とは
（福知山市史から引用）

慶応三年暮、大阪城にあって着々軍容を整えつつあった幕府軍に対峙する在京の薩長軍には、決死討幕の仕気は盛んであっても、絶対の勝算があった訳ではない。そこでもし万一緒戦につまずいた場合は幼帝を奉じて比叡山にこもると見せかけ、山陰道に逃れ、すでに意志疎通している因州鳥取藩をたよって、山陰の一角に新帝の行在所を設け、再起を図ろうとする計画があった。そのため、開戦の正月三日、若年ながら岩倉具視にその才幹気魂を認められていた西園寺公望（十九才）に薩長の精兵二百余人を付け、丹波口に待機させていた。翌四日西園寺を山陰道鎮撫使に任命し、時を移さず進発させた。征東大総督府の配下に属する鎮撫使には東海道、山陰道、東山道、北陸道、奥羽、中国・四国、九州の七鎮撫使があるが、開戦と同時に進発したのは、東海道、山陰道の二鎮撫使のみで、他はすべて一月二十日以後の発令である。山陰道鎮撫使一行は三丹の関門亀山藩の動向を警戒して老の坂を避け、密かに嵯峨から間道を伝い。かねての密約のあった丹波馬路村に入った。待機していた馬路村郷士二百余名を加えて陣容を張り、翌六日亀山に向かった。いとも簡単に降伏した後は、八日園部藩、九日篠山領に、十日福知山藩降伏。

鎮撫使総督は十四日午後四時福知山に到着。総督一行は本陣、随従の諸藩兵は各寺院に分宿した。本営三十二人、郷士六十二人、薩摩隊長・川南藤右衛門以下百八人、長州隊長・小笠原美濃介以下百十七人、柏原八十一人、篠山六十四、出石四十八人、計五百十三人。十八日朝六ッ半時（七時頃）御立下船戸口（広小路）から十六隻の高瀬舟に分乗、小雨の中を水路田辺に向かった。

由良へ来た?。由良を通った?

ここからが三通りの事が考えられる

（まずは舞鶴市史による）

説一、十八日大川で上陸し、藤津峠を越えて田辺城下に入った。田辺へ来たのは六百二十四人となる。

小さな城下町にこのような人数が繰り込んできただけでも、大変な混雑が想像される。

二十一日、鎮撫使一行は田辺を去って宮津へ向かった。藤津や由良まで藩士が随従した。

（宮津市史）

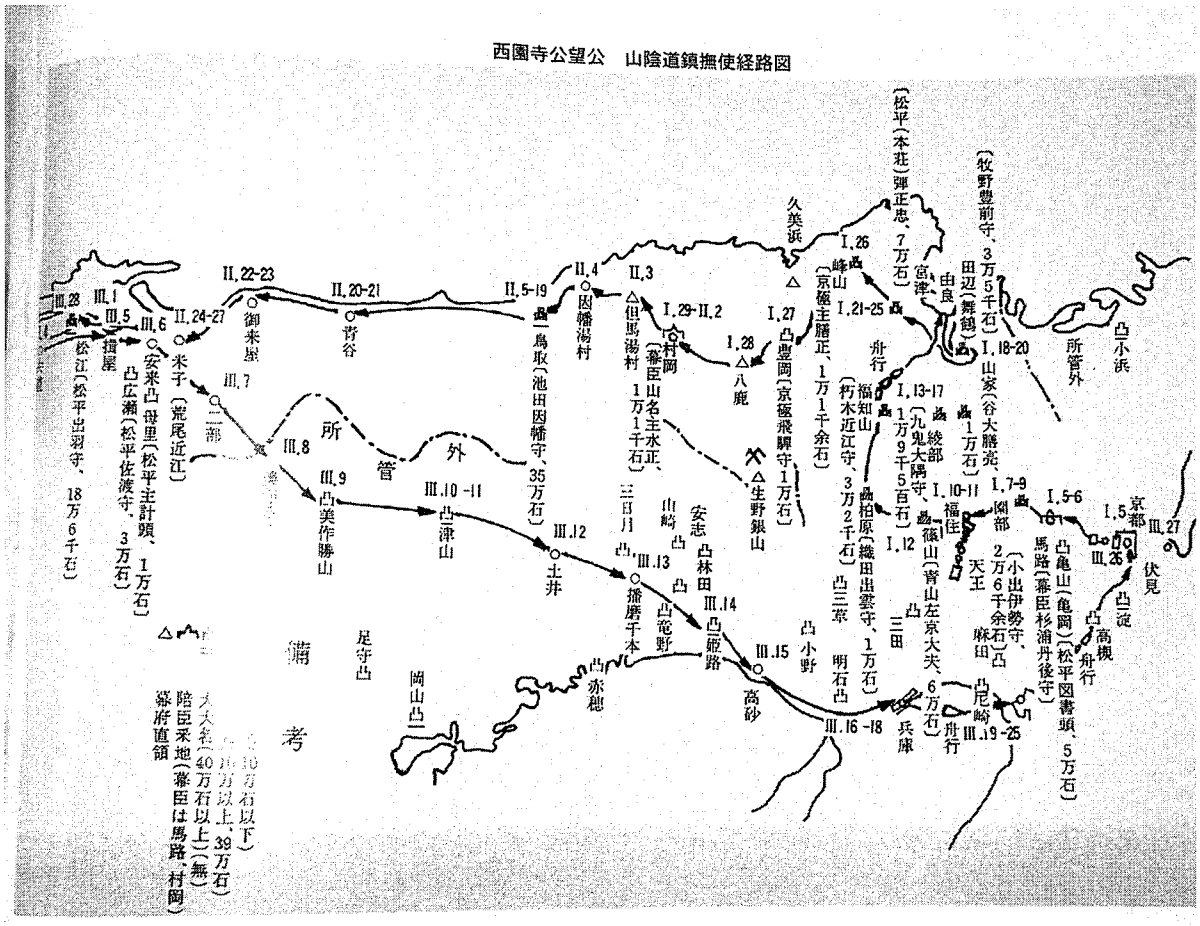
それに先立って一月十九日午後十時頃、先発隊として園部、小出両藩兵と丹波の郷士ら合計二百八人が、田辺から園田峠（栗田峠）を越えて宮津に到着した。西園寺の本隊は、一月二十一日午後八時に、（木札通り）宮津本陣三上金兵衛方に着陣した。由良の木札通りと考えると先発隊、本隊とも由良を通った。

説二、市史通りに田辺から先発隊として園部、小出両藩兵と丹波の郷士ら合計二百八人が由良を通り宮津へ、本隊は漆原を通り宮津に入った。この説は木札通りではないが、由良に大人数の大騒ぎの記録、言い伝えもない所から考えられない事では無い。由良の木札には二番二十四人と詳細に書かれているところから数日前に準備していたが、本隊ではなく先遣隊が来た。

説三、上図の大山柏　山陰道鎮撫使経路図を見ると舞鶴市史と異なり、福知山から舟航で由良に来て後田辺へ向かったように書かれている。西園寺公望公本隊は田辺城下に行く前に、由良に来て、由良を管轄化に置き、田辺藩の帰順を確認した後田辺に入った。その為には先遣隊が市史にあるように田辺に福知山から直接入ったと考える。

十九日市史通り先発隊として園部、小出両藩兵と丹波の郷士ら合計二百八人が由良を通り、二十一日四百人近い本隊は大山柏著の山陰道鎮撫使経路図では宮津に行くのに由良を通ってい

西園寺公望公　山陰道鎮撫使経路図　大山柏「戊辰戦争史」



ない経路図になっている。（上図）漆原を通り宮津に入った。由良に残されている木札と違う行動が取られている。当時の情報伝達から考えても木札は数日前に準備したと思われる。又は後日に記録として書いたのかもしれない。

大山柏著　山陰道鎮撫使経路図の通り由良に来たと考えたい。

何故なら当時の由良は北前船の船主、船頭が多く又製塩で豊かであり、田辺藩の金蔵と言ってもよい位置を占めていた。由良を押さえれば田辺藩は息の根を止められたようなものとなった。

木札の疑問点

弐番弐四人と人数まで詳細に記されている点について

一、数日前に連絡を受け書かれた

二、裏面は記録の為後日書かれた

だとすれば説一、二、三、どの状況も成り立つ。今後新しい資料がみつかり、事実が解る事を期待したい。

その後**亀岡文化資料館**にて**山陰道鎮撫隊「丹波の郷士と幕末維新」展示（平成三十年三月）**で「御勅使御発行日誌」や「官軍御用日記」等によれば舞鶴市史に述べられている説一が正しいようである。

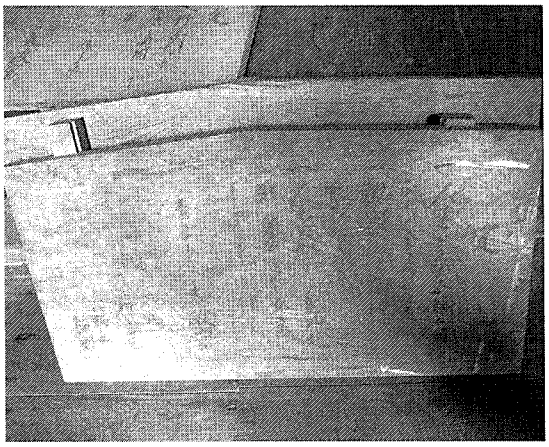
前述の資料によれば当日（二十一日）は大雪であったことが解り、由良で昼食をとったとある。

大雪にも関わらず大人数が険しい七曲り八峠を通ったとは、この時代の人は今では考えれないような体力を有していた。

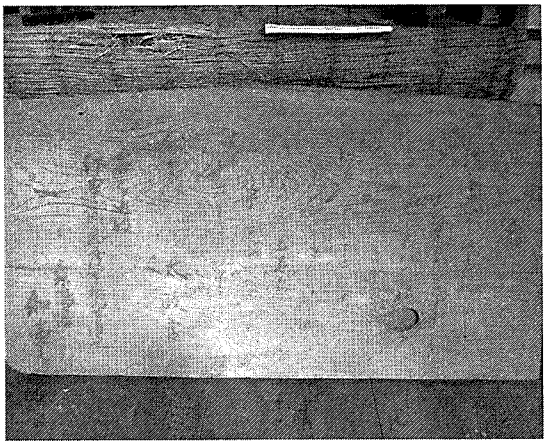
「そのニ」高札「五榜の掲示」
（由良北前船資料館展示中）
二〇一六年七月発行の公民館だよりに書いたように

第一札：五倫道徳遵守
第二札：徒党・強訴・逃散禁止
第三札：切支丹・邪宗門厳禁
第四札：万国公法履行
第五札：郷村脱走禁止

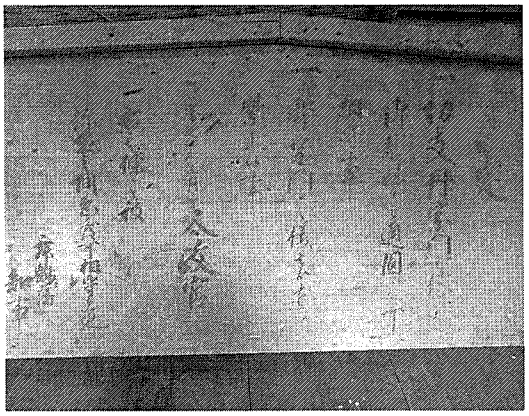
第一札　五倫道徳遵守



第二札　徒党・強訴・逃散禁止



第三札　切支丹・邪宗門厳禁



慶應四年三月　太政官
右之條々被
仰出之間急度可相守者也
舞鶴藩　知事

明治新政府は明治元年三月十五日旧幕府の高札一切を撤去して五榜の掲示と呼ばれる高札を立てさせた。五榜のうち一、二、三が由良に残されている。今年三月で百五十年となる。この記念すべき歴史資料「その一（長州様）」、「そのニ（五榜の高札）」の木札、高札が由良の明治維新百五十年の貴重な歴史遺産である。

「新宮涼庭」生誕二百三十周年（二）

十九歳の正月は、久しぶりに両親と新年を祝って、喜びにたえず次の詩を詠んだのである。

江口ノ千家物色新ナリ
無辺ノ草木大和伸ブ
慈親同ジク酔ウ屠蘇酒
レ不似前年客舎ノ春

十九歳。医師開業。丹後・但馬の患者を診察するうちに、身に付けた漢方医学では対応しきれない患者に度々遭遇し、自己の身に付けた医師修業に疑問を持つようになった。

文化四年（一八〇七）治療困難な病気を前に、懸命に諸家の医書を渉猟するうち、宇田川玄随の訳した「西説内科撰要」の黄疸篇を読み、西洋医学の先進性に驚き、長崎に行って、西洋医学を学ばねばならぬと決意したのである。しかし、父母に許諾を求めるも父母は許さなかった。

文化七年（一八一〇）二十四歳の涼庭。長崎遊学の熱意に父母遂に折れ、遊学を許されたのであります青年涼庭は、宇田川玄随によって蘭学への眼を開かれたのである。そして三年をかけて各地の名医を訪ね、医学や語学（オランダ語）を学び、各地の患者を治療しつつ、長崎に着く。

文化十年九月十六日（一八一三）に長崎入り。オランダ語学ぶ。同年十月二日に吉雄権之助に入門しました。外国人のエンスリー、スロイトルは陽暦十一月二十五日に出帆したので涼庭が両者に直接会うことが出来た時期は一ヶ月足らずでした。

文化十二年（一八一五）二十九歳。勉強に専心し、猛勉強を敢行。オランダ語の医書を翻訳。末次忠介に弧算（数学）を学ぶ。「窮理外科則」十三巻を嘉永三年まで三十年かけて翻訳。

文化十四年～文政元年（一八一七～一八一八）涼庭三十一歳から三十二歳。蘭医の治せなかったオランダ人ゴーゼマンの頭痛を見事に治したことから、良医としてオランダ館入りを許される。文政二年（一八一九）三十二歳。涼庭は帰郷し有馬涼築の娘で春枝を妻とした。春枝の母は涼築の後妻で田辺藩士山中氏の娘であった。涼庭と春枝とは有馬家に学僕をしていたころから親しんでいた仲であった。

天保五年（一八三四）四十八歳。京都で医師開業をする。苦学数年、蘭医直伝の涼庭の名声は、まもなく京都の蘭医家中屈指のものとなった。文政六年（一八二三）シーボルトが蘭館医として来日。文政九年（一八二六）二月、江戸参府に随行したシーボルトは、十日京都に入った。日本の友人達が宿舎を訪ねてきた。シーボルトは、小森肥後介及び新宮涼庭をヨーロッパ学問の大崇拝者にして当地に最も優れた医師の一人なり。と涼庭を高く評価されている。

天保九年（一八三八）五十二歳。「西遊日記」刊行。天保十年（一八三九）五十三歳。鯖江藩に五千両調達。京都南禅寺門前に学問所「順正書院」を建設。八学科を設け、京都初の蘭医学校となる。

天保十二年（一八四一）五十五歳。郷里、田辺藩に千五百両貸付。

安政元年（一八五四）六十八歳。正月五日、病気の為京都にて死去。南禅寺、天授庵に葬られる。（終）

新宮涼庭顕彰碑が由良神社の境内に建立されている。是非読みに訪れていただきたい。

資料提供　新宮涼輔氏

編集　主事

短歌

枡本　清

老杉に昼なお暗し永平寺
鐘の音聞きつ父母眠る菩提

表彰式謝辞読み終えしその時に
山田知事さん温かな握手

拍手喝采舞台に花咲く老大生
閉講式に努力の成果

満開の駅前通りで花見酒
宴のコップに降る菜種つゆ

由良に住み遠くに在りて偲ぶもよし
越後はなれて八〇有余年

平成29年度 宮津市人権標語優秀作品

思うより　言葉で伝える　ありがとう　（小学４年生）

だれにでも　にこにこ笑顔で　元気を配達　（小学５年生）

認め合い信じ合い助け合い　三つの愛（合い）で　（小学６年生）

編集後記

最近、近所を歩いていると観光客の方によく出会いますが、すれ違いざまに聞こえる会話が外国語で、びっくりすることがあります。聞くところによると、京都丹後鉄道の「あかまつ」が丹後由良駅に約四十分停車するとのこと。その停車時間に駅前の足湯や酒蔵まで足を運ばれるようです。外国の方が由良うちを歩かれることは一昔前には見られなかった光景で、これも国際化なのかと感じています。

さて、七月に入り夏を迎えました。今後、灯篭流しやふるさと祭り、子ども地蔵盆&盆踊りといった行事も行われます。小さな地域で行われる小さな行事かもしれませんが、今の子どもたちに何か一つでも感じてもらえるものがあることを願いつつ、皆元気で行事に取り組めたら良いなと思っています。

由良地区公民館文化部　中西